

2018/08/26

「私は門です」

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。羊の囲いに門からはいらなくて、ほかの所を乗り越えて来る者は、盗人で強盗です。しかし、門からはいる者は、その羊の牧者です。門番は彼のために開き、羊はその声を聞き分け、彼は自分の羊をその名で呼んで連れ出します。彼は、自分の羊をみな引き出すと、その先頭に立って行きます。すると羊は、彼の声を知っているのです、彼について行きます。しかし、ほかの人には決してついて行きません。かえって、その人から逃げ出します。その人たちの声を知らないからです。」イエスはこのたとえを彼らにお話しになったが、彼らは、イエスの話されたことが何のことかよくわからなかった。そこで、イエスはまた言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしは羊の門です。わたしの前に来た者はみな、盗人で強盗です。羊は彼らの言うことを聞かなかったのです。わたしは門です。だれでも、わたしを通過してはいるなら、救われます。また安らかに出入りし、牧草を見つけます。盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。」(ヨハネ 10:1-11)

イエス・キリストは、ご自身を羊の牧者にたとえ、また羊の門にたとえておられます。まず良い牧者であるイエス・キリストという面から見ていきましょう。

良い牧者であるキリスト

ここでイエス様が、盗人で強盗と呼んでおられるのは、パリサイ人のことです。

というのも、イエス様がこの言葉を語られる直前、一人の盲人をおいやしになったのですが、パリサイ人達は、彼がイエス様を信じることを阻止しようとし、あくまで彼が信じることをやめようとしないので、宮から追い出したのです。このように、民の指導者でありながら、自分の損得のために生き、まことの神への信仰を妨げるパリサイ人達を指して、イエス様は、盗人で強盗と言っておられるのです。

さて、この御言葉の前半に登場する羊の囲いは、町中の囲いであり、数人の羊飼いが共同で使う囲いです。羊飼いは、自分の羊を野原に連れて行くために、門のところでそれぞれ自らの羊を呼び集めます。すると、羊は自分の牧者の声を聞き分け、彼についていくのです。他の牧者にはついていきません。

これが神と私たちの関係です。神様は私たち一人一人を名前と呼ぶほど、親しく知っておられ、私たちを導いてくださるということです。そして、私たちの魂も、自分の造り主を知っているので、その声に反応します。これが、神が私たちに救いの御手を差し伸べ、それに応答することで救われるという、救いの原理です。

人間は神のいのちを分け与えて造られました。それは、もともと、神と一つになって生きるように造られているということです。ですから、いくら他のもので満たそうとしても、虚

しさを感じてしまうのです。私たちの魂は、ただまことの神の呼びかけに応答する時、平安を得ます。これが、牧者としてのイエス・キリストと私たちの関係です。

門であるキリスト

さて、羊を入れる囲いには、町中の共同で使う囲いの他に、町から離れた場所で野宿する時に使う天然の囲いがありました。ちょうど岩場で囲まれているような場所で、この囲いに羊を入れた後は、羊飼自身はその入り口に横たわり、侵入しようとするオオカミなどから羊を守ったのです。

イエス・キリストが、ご自身を門であると言われたのは、この関係をなぞらせています。イエス・キリストを通らなければ、人は安息の場所である天の御国に入ることはできず、イエス・キリストを通して救いを得た後は、その安息の場所を安らかに出入り入ったりすることができるのです。これは非常に面白い表現です。

私たちは、救いを得た後、安息の場所にとどまるのではなく、この地上での生活が続きます。つまり、国籍は御国の者となりましたが、現住所は、この地上にあるということです。この地上で生活しつつも、自分の意思で、御国と行き来し、平安を得て、御言葉によって養われるのです。

御国の者として地上で生きる

御国の者となった私たちは、この地上で何を、何を与えて生きるのでしょうか。

神は『われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう』(創世記 1:26) と言って、人をお造りになりました。三位一体の神は、互いに信頼し合い、仕えあい、ひとつとなって働かれる神です。神は私たちに、互いに愛し合い、神を愛し人を愛するように教え、神ご自身が愛であると教えています。

「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。あなたがたは互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」

(ヨハネ 13:34)

『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』

『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』(マタイ 22:37、39)

神は私たちに愛することを教えますが、愛されることがわからなければ、愛することはわかりません。私たちが愛情を感じるのは、大切にされている、尊重されているなどを感じることができる時です。しかし、人の感じ方は、互いの状況や関係によってさまざまに異なりますから、愛を人の尺度で測ることはできません。しかもこの世は見えるものに支配されており、愛情も見えるものではかろうとしがちです。

現代では、多くの人が愛されている証拠を求めて、いろいろなサイトを検索します。しかし、そのような情報に惑わされると、この通りにされなければ愛されていないのではないか

と不安になり、これを実行しなければ愛しているとはいえないのではないかと不安になってしまいます。同じことをしても、愛を感じるかどうかは、時と場合と人によって異なります。私たちが本当の意味で愛する者となるためには、真の愛を体験する必要があります。それをしてくださった方が、イエス・キリストです。イエス様の愛を受け取る時、私たちは、これまで自分が考えていたものが愛ではなく、何が本当の愛かを知ることができるのです。

愛を受け取る

人間は神のいのちによって造られ、神と信頼し合い、ひとつになって生きるように造られました。ですから、すべての人間は、心の奥底で神の愛を知っているのです。それなのに、人間が今生まれながらに神を知らないのは、アダムとエバがサタンに騙され、サタンの言葉を信じたことで、神と人との信頼関係が壊れてしまったからです。信頼というのは相互関係ですから、片方が他のものを信じるなら、その関係は壊れます。人は神以外のものを信じた結果、神を見失い、神との関わりを失いました。

しかし、人が神を見失った後も、神の愛は変わらず、私たちを愛し、御手を差し出し続けてくださっています。神の働きかけによって、人は様々な場面で神の愛に気づきますが、しがみついていたこの世のものを、なかなか手放すことができません。それは恐れのためです。

私たちがしがみついているものとは、何でしょうか。それは、言葉を変えると、私たちが、日頃、自分の支えとしているものです。家族、友人、自分の努力や誠意、学力、地位、お金など、これまでつらい時にあなたを支え、喜びを与えてくれたものがあるでしょう。もちろん、それだけでは心は満たされず、かえって頼りにしていた物に傷ついたり裏切られたりして、真の神を知るきっかけともなるのですが、いずれにしても、私たちは神と新しい関係を築くことよりも、一度は自分を支えてくれたものがもう一度自分の支えとなることを望んでしまうのです。どんなに素晴らしい神との関係があるとしても、未知のものより、かつて体験したもののほうが安心なのです。

「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」(ヨハネ 14:27)

神が私たちに与える安心は、これまでのものとはまったく違うものです。その安心を味わうためには、神以外に自分が頼ってきたものを手放す必要があります。私たちがこの世の物を手放す恐れに打ち勝つことができるように、イエス・キリストは十字架に架かり、ご自分のいのちをかけて、私たちを愛していることを示してくださいました。

私たちが、この世の物以上に、神の愛を信頼できるようになるために、イエス様はご自分のいのちを捨ててくださったのです。

「人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」(ヨハネ 15:13)

神に愛されていることを知った私たちは、これ以上の愛はないということも知りました。それでも、長い間しがみついていたものを手放して、神だけを信頼するには、恐れがあります。私たちは、何度も愛を確認しなければ、不安でたまりません。

ですから神は、私たちがこの世で会う一つ一つのことを用いて、何度もイエス様のもとに出入りして、御言葉を食べ、神の愛をますます深く知ることができるように導いてくださるのです。

神だけを信頼できない弱さ

私たちは、神が私たちを愛してくださっていることや、神が絶対に良くしてくださることを信じているのに、なかなかこの世の物を手放して、神にゆだねることができません。このことに対して、申し訳なさやうしろめたさを感じる時、私たちには3つの選択肢があります。

ひとつは、私は正しい、私は悪くないと開き直る方法です。これはパリサイ人と同じ方法です。彼らは、自分の良い面だけを見て、誇りました。自分で自分を良いものだと認定するために、自分で良いことと悪いことのルールを定めました。そして、自分の罪にふたをしたのです。

もうひとつは、とても神様に顔向けできないとして、神と距離を取る方法です。「私のような人間が恵みを受けるのはおこがましい」とか「ここは自分で頑張りますから、神様、立ち入らないでください」と、初めから距離を取り、神の助けを受け取ろうとしません。神に感謝しつつも、自分の不十分さを自覚しているので、ゆだねられた分だけ恵みを受け取れば十分だとして、大胆に神の前に出ることをしません。

しかし、神が私たちに選んでほしい選択肢は、ありのままで神の前に出てくることです。惨めな自分、弱い自分で結構、私たちが完全な者になるのは、神と一つになった時です。人だけで完全になることはできないのです。

ですから、「あなたにゆだねたいのに、この世の物を手放すことができない私を助けてください」と、正直に告白して、神の助けを求めれば良いのです。

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。」(マタイ 5:3)

御国への唯一の門であるイエス様を通して、救いを得た私たちが、その御国に「安らかに出入りし、牧草を見つける」とは、この地上で様々な失敗を繰り返しても、恐れることなく、安らかに神の前に出れば良いということです。神を信じながらも、ゆだねられないでいる私たちが、何度失敗しても神は受け入れて下さり、愛を注ぎ、導いてくださいます。自分が、神に全幅の信頼をおけない霊的に貧しい者だということを自覚したら、そのままの姿をイエス様に祈り、助けを求めましょう。そうすれば、「それでも私はあなたを愛している」という神の愛を知ることができ、御言葉を深く味わい、平安を得ることができます。天の御国は、私たちが属する国だからです。

こうして私たちは神の愛を知り、また神を愛することを知って生きます。そして、神を愛したいという思いは、人を愛することにつながっていくのです。

この世に遣わされた羊として生きる

神の呼びかけに応答した者は救われ、御国の者となりました。しかし、現住所はこの世にある、いわば御国から遣わされた羊です。国籍は御国であっても、この世に赴任中なのです。

イエス様という門を安らかに出入りするとは、神と交わりをすることを指します。イエス様という門を安らかに出入りし、神との交わりを楽しみ、神の愛を受け取ることで、私たちは、神を愛し、人を愛するという、神が私たちを造った目的に近づきます。人間には、本来、人を愛したいという本能が備わっているのですが、それは、神の愛を十分に受け取ることによってのみ可能なことです。

私たちは、どんなときにも無条件で人を愛せるほど、強い人間ではありません。生きることに疲れ、愛することに疲れ、心に怒りと絶望を感じることもあるでしょう。けれど、大切なことは、そこに留まらないで、主の囲いの中に戻ることです。

疲れ、傷つくのは、自分の思いが相手に通じないからです。明らかに相手が間違っていると思えば思うほど、私たちはどうすればいいのかわからなくなります。しかし、本当に私たちがつらい原因は、神と思いが一つになっていないことです。神と思いが異なること、それが罪です。私たちがつらいのは、罪を犯しているからなのです。自分の罪が自分を苦しめているのです。思い違いをしないでほしいのは、神はそのことを決して責めたりはせず、ただただあなたを助けたいと願っておられるということです。

私たちは、御言葉に従って正しい行いをすれば平安かという、そうではありません。神が罪人の私たちをそのまま受け入れてくださったように、罪人を愛することができる時、平安を得ることができるのです。私たちが平安にするのは、行いではなく、愛です。それは、罪を受け入れるということではありません。罪は罪として、互いに主の前に差し出すことができるように、祈り、励ましあうということです。ですから、自分で支配することをやめ、互いの罪を神にゆだね、神の愛を受け取る時、私たちはいやされます。神は私たちの罪を責めません。かえって傷つき疲れた私たちをあわれみ、いやしてくださいます。ですから、怒りも悲しみも、ありのまま神様の前に安らかに告白できるのです。

人を愛するとは、神への信頼なくしてはできないことです。この地上で私たちは、神に愛され、罪をいやされ、神を愛し、人を愛することと通して、永遠のいのちを豊かにしていくことができるのです。

「わたしにはまた、この囲いに属さないほかの羊があります。わたしはそれをも導かなくてはなりません。彼らはわたしの声に聞き従い、一つの群れ、ひとりの牧者となるのです。」(ヨハネ 10:16)

私たちがこの地上でできることの一つは、同じ囲いに属していない他の羊と関わることです。私たちは、この地上で、神様が私たちを造った目的である愛を実践することができます。それは、御国に出入りして平安を得、御言葉を味わって生きなければできないことであり、人を愛することで自然と神を愛することも体験できるのです。

神様のはかりしれない知恵に感謝しましょう。